

100以上の数を表わすポリネシア諸語の数詞

その他（別言語等） のタイトル	An outline of Polynesian numerals for 100 or higher
著者	塩谷 亨
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	9
ページ	141-164
発行年	2011-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/700

100以上の数を表わすポリネシア諸語の数詞

その他（別言語等） のタイトル	An outline of Polynesian numerals for 100 or higher
著者	塩谷 亨
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	9
ページ	141-164
発行年	2011-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/700

100 以上の数を表すポリネシア諸語の数詞*

塩谷 亨

An Outline of Polynesian Numerals for 100 or Higher

Toru SHIONOYA

要旨：現在、多くのポリネシア諸語には大きな数を表わす外来語の数詞が導入されているが、それとは別に、固有の単語としても、百、千、万のような大きな数値を指す数詞を持ち、中には百億といった巨大な数値を指す数詞を持つ言語もある。本稿ではポリネシア諸語に属する 31 の言語について、100 以上の大きな数を指す数詞としてどのようなものが存在するかを概観した。その中で、例えば、「百×千」で「十万」を表わすというように、百、千、万などの数詞を組み合わせ、より大きな数詞を形成するという手法は近代になってから用いられるようになってきたという傾向が観察された。また、数詞システムの延長上にあると思われる表現で、数が大きくなりすぎて数えることを断念した時に用いる「無数、無限、とても大きな数、数え切れない」等の様々な表現も多くの言語で観られたが、その表現法にもいくつかの傾向が観察された。

キーワード：ポリネシア諸語 数詞

1. 序論

1.1. 本稿の目的

本稿の目的は文部科学省科学研究費補助金による研究「ポリネシア諸語の数詞体系と数詞間の文法的特性の推移についての対照研究」の第一段階として行ったポリネシア諸語の数詞システムについての調査で得られたデータから、特に、100 以上の大きな数を表わす数詞の語彙体系について概観することである。

現代のポリネシア諸語の数詞システムを概観すると、二桁の数まではポリネシア諸語固有の数詞で表すことができるが、三桁の数からは、外来語（英語の *hundred* から）を用いるケースと、固有の数詞を用いるケースとの二つに分かれる、という傾向があることが分かる。また、固有の数詞を用いて 100 以上の数を表す言語の中では、相当大きな桁の数を示す数詞まで持っている言語の例がいくつもみられる。Bender and Beller (2006a:41, 2006b:396)は、ポリネシア人の祖先たちは少なくとも 10 の 3 乗までは固有の数詞システムを拡張させており、また、多くのポリネシア諸語ではさらに大きな桁の数を発達させ、最大で 10 の 10 乗まで表す数詞を持った言語があることを指摘している。

本稿では、できるだけ多くのポリネシア諸語の文献を参照し、100 以上の数を表す単語に

ついて、固有の単語と外来語の両方を含めて、データを収集した。その際には、「無数」、「数え切れない」のように具体的な数を表すものではないが、各言語の数詞システムの延長上にあると思われるものもデータに含めた。実際、3.2節で述べるように、「無限」、「数え切れない」という概念を表す単語が、その言語の最も大きな桁の数を表す数詞とオーバーラップしているケースが何例も存在した。また、単に「多数の」、「多い」を意味する単語でも数詞システムの単語と関係ありそうなものについては欄外に示した。

普段あまり用いないようなかなり大きな数を表わす数詞の用法については、揺れの存在が予想される。実際、同じ言語の文法書・辞書であっても、その示す数詞体系に差が見受けられる場合がある。本稿では、そのような差異も示すため、同じ言語について複数の文法書・辞書のデータを併記した。

また、ポリネシア諸語では、例えば魚を数える場合、タロ芋を数える場合など、数える対象によって異なる数え方を用いる場合がある。その際には、同じ数詞が用いられる場合でも、一般的な用法の場合に指す数値と特定のものを数える用法の場合に示す数値が異なる場合もある。例えば、Elbert (1988:188-9)は、レンネル・ベロナ語の *noa* という数詞は一般的には‘1,000’を指すが、ヤム芋を数える場合には‘10,000’を表わすと述べている。このような事例はいろいろな言語で見られ、数えられるもののジャンル分けも多様で、非常に興味深い項目ではあるが、本稿では、ポリネシア諸語の数詞の全体像をより鮮明にするため、特に必要がない限りは、最も一般的な数え方で用いられる数詞システムを提示する。

1.2. ポリネシア諸語とその下位分類

ポリネシア諸語は地理上のポリネシア（ハワイとニュージーランドとイースター島を結ぶ三角形）及び隣接するメラネシア、ミクロネシアの一部で話されている同系言語のグループである。太平洋上の広大な地域に拡張しているにもかかわらず、言語間には著しい文法的、語彙的な類似性が存在する。例えば、北太平洋のハワイ、そのはるか南のマオリ語（ニュージーランド）、更にはるか東のイースター島語の三つの言語について「私は～です」のように自分の名前を述べる文を比較してみると次のようになる。

ハワイ語	‘O Pua ko‘u inoa. 前置詞 プア 私の 名前 「私の名前はプアです」 Elbert and Pukui (1979:133)
マオリ語（ニュージーランド）	Ko Hāriata taku ingoa. 前置詞 シャルロット 私の 名前 「私の名前はシャルロットです」 Moorfield (2001:3)
イースター島語	ko kóri toóku inoa 前置詞 ジョージ 私の 名前 「私の名前はジョージです」 Fuentes (1960: 613)

Table 1: 三つのポリネシア諸語の比較「私の名前は～です」

このように、文構造、単語いずれも極めて類似していることがわかる。

ポリネシア諸語内部では、更にその系統により下位分類がなされる。下位分類は研究者によって若干異なることがあるが、概ね同様である。本稿では、亀井他(1992:1163-4)の分類に従う。以下にその下位分類と、各グループに属する言語のうち、本稿でデータを提示するものの言語名をカッコ内に示す。

ポリネシア諸語は大きく三つのブロック、1) トンガ語群、2) 西部ポリネシア諸語、3) 東部ポリネシア諸語に別れる。西部ポリネシア諸語にはサモア・域外ポリネシア諸語が属し、東部ポリネシア諸語の中にはイースター島語、マルケサス語群、タヒチ語群が属する。本稿で扱う言語は、1) トンガ語群 (トンガ語、ニウエ語)、2) 西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群 (プカプカ語、ツヴァル語、ニウアフォオウ語、サモア語、東ウヴェア語、東フツナ語、ヌクオロ語、カピガマラギ語、ヌクリア語、ヌクマヌ語、ルアギウア語、シカイアナ語、レンネル・ペロナ語、ピレニ語、ティコピア語、マエ語、メレ・フィラ語、西ウヴェア語、西フツナ語)、3) 東部ポリネシア諸語 {イースター島語、マルケサス語群 (ハワイ語、マルケサス語、マンガレヴァ語)、タヒチ語群 (クック諸島マオリ語、ニュージーランドのマオリ語、タヒチ語、ルルツ語、ラパ語、ツアモツ語)} である。¹⁾

2. 言語別・100以上の数を表わす数詞一覧

今回得られた全データを言語ごとに提示するが、その際には、前節で示したポリネシア諸語の一覧の順に提示することとする。以下の表中にはそれぞれ 100 や 1,000 など 10^n の数値を示す語を表示するが、200 や 400 など 10^n 以外の数値を示す語についてはその都度それが示す数値を横又は下に表記した。

2.1. Tongan トンガ語 (トンガ語群)

Thompson (2000:xiv-xv)、Schumway (1988:647)、Churchward(1953:172)は、いずれも 100 以上の数を表す数詞として、teau ‘10’、afe ‘1,000’、mano ‘10,000’、kilu ‘100,000’ と外来語である miliona ‘1,000,000’ の五つを挙げている。現代語簡易辞典である Tu‘inukuafe (1997:270)では afe の次は miliona となっている。

	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6
Thompson	teau	afe	mano	kilu	miliona
Schumway					
Churchward					
Tu‘inukuafe	teau	afe			miliona

Table 2: Tongan numerals for 10^2 or higher

2.2. Niuean ニウエ語 (トンガ語群)

Williams (1893:17&68)には teau ‘100’、afe ‘1,000’ の二つが挙げられている。Tregear and Smith (1907:4)では、更に上の数を表わす afe mo afe 「とても大きな数」 ‘a very large number’ が数詞

一覧に含まれている。Sperlich (1997:223)では外来語の *miliona* ‘1,000,000’も加えられているが、近隣のトンガ語で‘10,000’を表す数詞として用いられている *mano* は単に「多量」を表す名詞とされている。

	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6	∞
Williams	teau	afe				
Tregear & Smith	teau	afe				afe mo afe
Sperlich	teau	afe			miliona	

Table 3: Niuean numerals for 10^2 or higher

2.3. Pukapukan プカプカ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

プカプカ語については、Beaglehole and Beaglehole (1938:353-354)は、*lau* ‘100’、*mano* ‘1,000’、*tini* ‘10,000’、*ngaulu tini* ‘100,000’ (=10x10000)を挙げ、更にその上を表す語として、具体的な数値は示さずに *manomano muamua*、*matinitini*、*makelekele*、更に「無限」‘infinite’を表わす *ye* の順に大きくなると述べている。

	10^2	10^3	10^4	10^5	<	<	<	∞
Beaglehole	<i>lau</i>	<i>mano</i>	<i>tini</i>	<i>ngalu tini</i>	<i>manomano muamua</i>	<i>matinitini</i>	<i>makelekele</i>	<i>ye</i>

Table 4: Pukapukan numerals for 10^2 or higher

2.4. Tuvaluan ツヴァル語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

ツヴァル語については、Besnier (2000:552)が、*selau* ‘100’、*afe* ‘1,000’、*miliona* ‘1,000,000’の三つを上げている。また、ツヴァル語の Nanumea 方言について、Ranby (1980)が *lau* ‘100’、*afe* ‘1,000’、*mano* ‘1,000’の三つに加えて、数詞のカウントの延長上にあると考えられる *kiu* 「数え切れない」‘innumerable’をあげている。²⁾

	10^2	10^3	10^6	∞
Besnier	<i>selau</i>	<i>afe</i>	<i>miliona</i>	
Ranby (Nanumea)	<i>lau</i>	<i>afe</i>		<i>kiu</i>
		<i>mano</i>		

Table 5: Tuvaluan numerals for 10^2 or higher

2.5. Samoan サモア語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

サモア語については、Neffgen (1918:37)は、数詞は *selau* ‘100’、*afe* ‘1,000’、*mano* ‘10,000’まであり、それより上は *manomano* という語で表わすとしている。同様に、Churchward (1951:40)も、*selau* ‘100’、*afe* ‘1,000’、*mano* ‘10,000’と数えて、それより上は *manomanō* 「数

え切れない」‘innumerable’となると述べている。

Pratt (1911:51)は固有のシステムと現代のシステムとの二つを区別し、かつては、selau ‘100’、afe ‘1,000’、mano ‘10,000’まで数え、それを超えると、「数え切れない」‘innumerable’を表わす manomānō 又は ilu と表現したが、現代では、mano ‘10,000’から上は、数詞を組み合わせて、sefulu afe ‘10,000’ (=10x1,000)、lau afe ‘100,000’ (=100x1,000)のように表現し、miliona ‘1,000,000’まで続くと述べている。尚、sefulu は数詞‘10’である。

Milner(1966)と Allardice (1985)は selau ‘100’、afe ‘1,000’、 mano ‘10,000’に加えて、「数え切れない」を表わす manomānō と、外来語の miliona ‘1,000,000’を挙げている。また、mano には「とても大きな数」 ‘any very large number’という意味があるとも述べている。

Mosel & So‘o (1997:79)は、Pratt(1911)の現代のシステムと同様に、selau ‘100’、afe ‘1,000’の後、sefulu afe ‘10,000’ (=10x1,000)、selau afe ‘100,000’ (=100x1,000)のような二つの数詞が合体したものを、最後に miliona ‘1,000,000’を挙げている。Hunkin (1988:48)も同様であるが、sefulu afe の上が miliona になっている。

	10 ²	10 ³	10 ⁴	10 ⁵	10 ⁶	∞
Neffgen	selau	afe	mano			manomano
Churchward	selau	afe	mano			manomānō
Pratt (original)	selau	afe	mano			manomānō
						ilu
Pratt (modern)	selau	afe	sefulu afe (10×10 ³)	lau afe (10 ² ×10 ³)	miliona	
Milner/Allardice	selau	afe	mano		miliona	manomānō
						mano
Mosel & So‘o	selau	afe	sefulu afe	selau afe	miliona	
Hunkin	selau	afe	sefulu afe		miliona	

Table 6: Samoan numerals for 10² or higher

2.6. Niuafu‘ouan ニウアフオオウ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Early (2002:852)がニウアフオオウ語の数詞として teau ‘100’、afe ‘1,000’、mano ‘10,000’、kilu ‘100,000’、miliona ‘1,000,000’を挙げている。これは Thompson (2002)等が示したトンガ語の場合と同じになっている。

	10 ²	10 ³	10 ⁴	10 ⁵	10 ⁶
Early	teau	afe	mano	kilu	miliona

Table 7: Niuafu‘ouan numerals for 10² or higher

2.7. East Uvean / Wallisian 東ウヴェア語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

東ウヴェア語については Rensch (1984:3,199,384)が、teau ‘100’、afe ‘1,000’とその延長上にあると考えられる kilu「とても大きな数」‘nombre tres grand’、更に外来語の miliona ‘1,000,000’を挙げている。

	10^2	10^3	10^6	∞
Rensch	teau	afe	miliona	kilu

Table 8: East Uvean numerals for 10^2 or higher

2.8. East Ftunan 東フツナ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Moyse-Faurie (1993:39,232)が東フツナ語の数詞として lelau ‘100’、と afe ‘1,000’の二つの形を、Rensch (1986:2,115)は kaulelau ‘100’、と afe ‘1,000’の二つの形を挙げている。

	10^2	10^3
Moyse-Faurie	lelau	afe
Rensch	kaulelau	afe

Table 9: East Futunan numerals for 10^2 or higher

2.9. Nukuoro ヌクオロ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Carroll and Soulik (1973:257,286,324-326)には lau ‘100’、mano ‘1000’のように mano の二つの数詞に続いて、更に semada ‘10,000’、seguli ‘100,000’、seloo ‘1,000,000’、sengaa ‘10,000,000’、semua ‘100,000,000’、sebugi ‘1,000,000,000’、sebagaa ‘10,000,000,000’までそれぞれ独立した形が挙げられている。Christian (1898:228) には mano ‘100’と「とても大きな数」‘a very large number’を表わす mano-tini のみが挙げられている。このように、mano が表わす数字が二つの文献の間で異なっている。

	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6	10^7	10^8	10^9	10^{10}	∞
Carroll & Soulik	lau	mano	semada	seguli	seloo	sengaa	semua	sebugi	sebagaa	
Christian	mano									mano-tini

Table 10: Nukuoro numerals for 10^2 or higher

2.10. Kapingamagangi カピガマラギ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア諸語)

Lieber & Dikepa (1974:40,113,123,128)には lau ‘100’、mana ‘1,000’、同じく‘1,000’を表わす

表現 *madangaholu lau e dahi* ‘1,000’ (=10x100)に加えて、「計り知れない数」‘untold numbers, a trillion’を表わす表現 *duumaa de gelegele* がある。分析は示されていないが Lieber & Dikepa (1974:71,87,817)によれば、*gelegele* は「砂」、*duumaa* は「およそ」、*de* は冠詞である。

	10^2	10^3	∞ (10^{12} ?)
Lieber & Dikepa	<i>lau</i>	<i>mana</i>	<i>duumaa de gelegele</i>
		<i>madangaholu lau e dahi</i> (10x100)	

Table 11: Kapingamarangi numerals for 10^2 or higher

2.11. Nukuria ヌクリア語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア諸語)

ヌクリア語については、Ray (1916:23)が Thilenius (Tと略記) と Parkinson (Pと略記) の二人の調査者のデータを参照し、Thilenius として(hu)tarau ‘100’、hua ‘1,000’、mano ‘10,000’、Parkinson として tupū helaū ‘100’、mano ‘1,000’を挙げている。このように *mano* が示す数値にずれがある。

	10^2	10^3	10^4
Ray (T)	(hu)tarau	hua	mano
Ray (P)	tupū helaū	mano	

Table 12: Nukuria numerals for 10^2 or higher

2.12. Nukumanu ヌクマヌ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

ヌクマヌ語については、Ray (1916:99)が *kelau* ‘100’ という形を挙げている。

	10^2
Ray	<i>kelau</i>

Table 13: Nukumanu numerals for 10^2 or higher

2.13. Luangiua ルアギウア語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Ray (1917:102)が、Parkinson、Friederici、Woodford という 3 人の調査者によるデータ (以下、それぞれ P、F、W と略記する) を示している、それによると‘100’を表わす数詞として P、W が *se lau* を、F が *he garau* を、‘1,000’を表わす単語としては P だけが *se mata* を挙げている。また、Salmond (1974:162-3, 190)は *kalau* ‘100’、*simaka* ‘1,000’に加えて、*maŋo* ‘1,000,000’ という形を挙げている。

	10^2	10^3	10^6
Ray (P)	<i>se lau</i>	<i>se mata</i>	

Ray (W)	se lau		
Ray (F)	he garau		
Salmond	kalau	simaka	maŋo

Table 14: Luangiua numerals for 10^2 or higher

2.14. Sikaiana シカイアナ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

シカイアナ語については、Ray (1917:38-9)は Cheyne (C と略記)、Scherzer (S と略記)、Woodford (W と略記)、Friederici (F と略記) の4人の調査者のデータを参照し、Cheyne は lo ‘100’、si-mata ‘1,000’、Scherzer は lo ‘100’、katoa-lo ‘1,000’、Woodford は katoa ‘100’、mano ‘1,000’、he aŋi ‘10,000’、Friederici は katoa ‘100’、mano ‘1,000’ の形を提示している。

Capell(1935-7:72)は、‘100’という数値を表わす数詞としては数えられる対象によって、kato ‘100 (men)’、lau ‘100 (fish)’の二つの形と、‘1,000’を表わす mano があり、kato には「無限に大きい数」‘indefinitely large quantities’の意味もあると述べている。

	10^2	10^3	10^4	∞
Ray (C)	lo	si-mata		
Ray (S)	lo	katoa-lo (10x100)		
Ray (W)	katoa	mano	he aŋi	
Ray (F)	katoa	mano		
Capell	kato / lau	mano		kato

Table 15: Sikaiana numerals for 10^2 or higher

2.15. Rennell-Bellona レンネル・ベロナ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

レンネル・ベロナ語については、Elbert (1988:188-9)によると、一般的な数え方に用いられる数詞は、gau ‘100’、noa ‘1,000’、bane ‘10,000’、tuia ‘100,000’、nimo ‘1,000,000’があるが、nimo は「ありえない大きな数」‘impossibly high number’も表すとしている。また、これらの相対的な順序に自信がない人も存在し、また、若者は 1,000 以上の数詞は使わないとも述べている。また、nimo は「忘れる、消える」‘forget, disappear’という意味があると述べている。1.1 節で述べたように、レンネル・ベロナ語では数えられる対象によって各数詞が指す数値が変わることがあるが、ここでは一般的な場合のみを提示する。

Ray (1917:174)は noa ‘100’、afe ‘1,000’、nimo te tau nga ‘10,000’の三つを上げている。このように両者の記述にはずれが見られる。

	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6	∞
Elbert	gau	noa	bane	tuia	nimo	nimo

Ray	noa	afe	nimo te tau nga	
-----	-----	-----	-----------------	--

Table 16: Rennell-Bellona numerals for 10^2 or higher

2.16. Pileni ピレニ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Ray (1920:86)は vesiki ‘100’ と kiu ‘1,000’ を挙げ、更に kiu には「数え切れない」‘innumerable’ という意味もあると述べている。

	10^2	10^3	∞
Ray	vesiki	kiu	kiu

Table 17: Pileni numerals for 10^2 or higher

2.17. Tikopia ティコピア語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Firth (1985:xxxvii) は、大きな数を表す数詞として、rau ‘100’、afe ‘1,000’、mano ‘10,000’ があり、更にそれを超える数を表わすには e vare「膨大なでたらめの数」‘a vast wild number’ (辞書の vare の項には「無限の」‘infinite’ となっている) という表現があるが、1,000 以上の数値を表わす数詞を認識できる人は少なく、そのためか、afe ‘10,000’、mano ‘1,000’ のように指す数値が逆転することもある、と述べている。尚、Firth (1985:30,593)によると、vare は「でたらめな」等の意味の単語で、e は時制マーカーとなっている。

Ray(1920:214)は rau ‘100’、afe ‘1,000’ の二つを挙げた上で、300 に達した時点で、「無限の数」‘indefinite number’ を表わす mano が用いられると述べている。それに加えて、もう一つ、「無限の数」‘indefinite number’ を意味する表現として ku vare を挙げている。

	10^2	10^3	10^4	∞
Firth	rau	afe	mano	e vare
		mano	afe	
Ray	rau	afe		mano
				ku vare

Table 18: Tikopia numerals for 10^2 or higher

2.18. Mae / Emae マエ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Capell (1962: 19)には、100 以上の数を表わす数詞としては ponotia e tasi ‘100’ が唯一挙げられている。⁴⁾

	10^2
Capell	ponotia e tasi

Table 19: Mae numerals for 10^2 or higher

2.19. Mele-Fila メレ・フィラ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Ray (1942:172)では、数詞一覧には10までしか挙げられておらず、また、用例においても28が最大の数字であり、三桁の数を表わす表現についてのデータは得られなかった。Tryon et al. (1995: 52)には mijikao ‘100’、mano ‘1,000’が挙げられている。Clark (1998:37,43)には mijikao ‘100’と manu ‘1,000’の二つの数詞が挙げられているほか、数詞によるカウントの延長上にあると考えられる語として、mantaṗaroṗaaro 「とても大きな数」 ‘A very large number’も挙げられている。⁵⁾

	10^2	10^3	∞
Tryon et al.	mijikao	mano	
Clark	mijikao	manu	mantaṗaroṗaaro

Table 20: Mae numerals for 10^2 or higher

2.20. West-Uvean 西ウヴェア語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

Leverd (1922:99)は、西ウヴェア語では5を単位として数えると指摘しているが、最も大きな数の表現として挙げられていたのは lua te henua ‘40’であり、三桁の数の表現についてのデータは得られなかった。

2.21. West Futunan / Aniwa-Futuna 西フツナ語 (西部ポリネシア諸語・サモア・域外ポリネシア語群)

西フツナ語については、Capell (1984)が shintarau ‘100’、mano ‘1,000’を、Dougherty (1983)が jintarau ‘100’と mano ‘1,000’をそれぞれ挙げている。

	10^2	10^3
Capell	shintarau	mano
Dougherty	jintarau	mano

Table 21: West Futunan numerals for 10^2 or higher

2.22. Rapanuian イースター島語 (東部ポリネシア諸語)

イースター島語については、Fuentes (1960:616-7)によれば、現在用いられているシステムでは、hanére ‘100’、tauatíni ‘1,000’、ahuru tauatíni ‘10,000’、millón ‘1,000,000’が用いられるが、伝統的には、ráu ‘100’、piére ‘1,000’、 máno ‘10,000’が用いられたと述べている。

Du Feu(1996:79-80)は、hanere ‘100’と tautini ‘1,000’を挙げている。

	10^2	10^3	10^4	10^6
Fuentes (modern)	hanére	tauatíni	ahuru tauatíni	millón

Fuentes (traditional)	ráu	piére	máno	
Du Feu	hanere	tautini		

Table 22: Rapanuian numerals for 10^2 or higher

2.23. Hawaiian ハワイ語 (東部ポリネシア諸語・マルケサス語群)

19 世紀中ごろにまとめられたハワイ語資料の復刻版である Beckwith (2007:113)には、lau ‘400’、mano ‘4,000’、kini ‘40,000’、lehu ‘400,000’、nalowale ‘4,000,000’が挙げられている。最高位の数詞 nalowale については、1865年に出版された辞書の復興版である Andrew (2003:415)では lehu が最高値であるとし、nalowale については数値を示さずに「単に、もうこれ以上先に行けない-もうこれより大きな数の組み合わせを理解することが出来ないということを表わす」‘only signifies that the person can go no further-that his mind fails to comprehend any higher or further combination of numbers’と述べているほか、kini も「無限に大きな数」‘any number indefinitely great’を表わすとしている。

Pukui and Elbert (1986:152,194,199,239,260)も同様に lau ‘400’から lehu ‘400,000’までは数値を示しているが、nalowale については数値は示さずにその意味を「無限」‘infinite’であるとしている。また、現代使われている外来語の数詞としては、haneli ‘100’、kaukani ‘1,000’、miliona ‘1,000,000’、pilionona ‘1,000,000,000’、kiliona ‘1,000,000,000,000’という形が挙げられている。尚、nalowale には他に「消える、忘れられる」等の意味が示されている。

	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6	10^9	10^{12}	∞
Beckwith	lau ‘400’	mano ‘4,000’	kini ‘40,000’	lehu ‘400,000’	nalowale ‘4,000,000’			
Andrews	lau ‘400’	mano ‘4,000’	kini ‘40,000’	lehu ‘400,000’				nalowale
Pukui & Elbert	lau ‘400’	mano ‘4,000’	kini ‘40,000’	lehu ‘400,000’				nalowale
	haneli	kaukani			miliona	pilionona	kiliona	

Table 23: Hawaiian numerals for 10^2 or higher

2.24. Marquesan マルケサス語 (東部ポリネシア諸語・マルケサス語群)

マルケサス語については south/east と north/west の二つの方言を区別して記述している。Dordillion (1904 :18-20, 22-23)は、south/east 方言では、200 未満の数値は 20 や 40 の組み合わせで、例えば e ua toufa me te tekau ‘40x2+20 =100’のように表現し、その後、au ‘200’、mano ‘2,000’、tini ‘20,000’を用い、一方、north/west 方言としては、400 未満の数値を 20 や 40 の組み合わせで表わし、その後、au ‘400’、mano ‘4,000’を用いると述べている。また、数詞による表現の延長上にあるものとして、さらにその上の「数えられない数」‘un nombre incalculable’

を表わす表現として、*mano* や *tini* や *puni*⁹⁾を4回繰り返す、*tini, tini, tini, tini* 或いは *puni, puni, puni, puni* 或いは *mano, mano, mano, mano* という表現があると述べている。

Cléac'h (1997:184-185)も Dordillion (1904) とほぼ同様であるが、south/east 方言では *au* '200'、*mano* '2,000'、north/west 方言では *au* '400'、*mano* '4,000' を挙げ、更に、パンの実 (bread fruit) の数え方として、south/east 方言では *tini* '20,000'、north/west 方言では *tini* '40,000' を挙げ、その延長上に、「数え切れない」「innumbrable」を表わす表現として、*tini* を繰り返す *tini, tini, tini* を挙げている。また、現代の言い方として、外来語による、*hanere* '100'、*tautini* '1,000'、*mirioni* '1,000,000' を挙げている。

Tetahiotupa (2009:51)は外来語の数詞および、外来語の数詞と固有の数詞 *ònohuu* '10' を組み合わせた形で、*hānere* '100'、*tautini* '1,000'、*ònohuu tautini* '10,000' (=10x1000)、*hānere tautini* '100,000' (=100x1,000)、*mirioni* '1,000,000' を挙げている。

	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6	∞
Dordillion (south/east)	<i>au</i> '200'	<i>mano</i> '2,000'	<i>tini</i> '20,000'			<i>tini, tini, tini, tini</i> / <i>puni, puni, puni, puni</i> /
Dordillion (north/west)	<i>au</i> '400'	<i>mano</i> '4,000'				<i>mano, mano, mano,</i> <i>mano</i>
Cléac'h (south/east)	<i>au</i> '200'	<i>mano</i> '2,000'	<i>tini</i> '20,000'			<i>tini, tini, tini</i>
Cléac'h (north/west)	<i>au</i> '400'	<i>mano</i> '4,000'	<i>tini</i> '40,000'			
Cléac'h (modern)	<i>hanere</i>	<i>tautini</i>			<i>mirioni</i>	
Tetahiotupa	<i>hānere</i>	<i>tautini</i>	<i>ònohuu tautini</i> (10x10 ³)	<i>hānere tautini</i> (10 ² x10 ³)	<i>mirioni</i>	

Table 24: Marquesan numerals for 10² or higher

2.25. Mangarevan マンガレヴァ語 (東部ポリネシア諸語・マルケサス語群)

1899年の辞書の復刻版である Tregear (2009:44-5,82,102) には *rau* '100' と *mano* '1,000'、*makiu* '10,000'、*makiuku* '20,000' が挙げられている他、数え切れない数を表わす単語として、*makorekore* 「計り知れない数」 'an immense number' と *tini* 「数え切れない数」 'a countless number' があがっている。

Te Rangi Hiroa (1938:417)は、*makiu* までは同様であるが、その後、*makiuku* の指す値は '100,000' で、さらに、*makorekore* '1,000,000'、*maeae* '10,000,000' まで続き、それ以上の大きな数「無限に大きな数」 'an infinitely large number' を表わす語として *tini*、*tinitini*、*mokiuku* を挙げている。

Lemaître (1985:9)では、makiuku までは Te Rangi Hiroa(1938)と同じ順番であるがそれぞれ 2 をかけた数値を表わしている。その後、makore ‘2,000,000’、makorekore ‘20,000,000’、tini ‘200,000,000’、maeaea ‘2,000,000,000’という大きな数詞まで続いている。

Tregear (2009:44)でも Lemaître(1985:9)でも、makiu よりもその反復形の makiuku の方が大きい数値を示すということでは共通しているが、前者ではそれらの差が二倍なのに対して、後者では十倍と、異なっている。

$10^2 \sim 10^6$	10^2	10^3	10^4	10^5	10^6
Tregear	rau	mano	makiu		
			makiuku ‘20,000’		
Te Rangi Hiroa	rau	mano	makiu	makiuku	makorekore
Lemaître	rau ‘200’	mano ‘2,000’	makiu ‘20,000’	makiuku ‘200,000’	makore ‘2,000,000’
$10^7 \sim \infty$	10^7	10^8	10^9	∞	
Tregear				makorekore	
				tini	
Te Rangi Hiroa	maeae			tini / tinitini/ mokiuku	
Lemaître	makorekore ‘20,000,000’	tini ‘200,000,000’	maeaea ‘2,000,000,000’		

Table 25: Mangarevan numerals for 10^2 or higher

2.26. Rarotongan / Cook Islands Maori クック諸島マオリ語（東部ポリネシア諸語・タヒチ語群）

Large (1902: 260)によれば、古来、ペアでものを数え、20 を一つのまとまりとするシステムの中で用いられた数詞として rau ‘200’と mano ‘2,000’を挙げ、更にそれよりも大きな数は e tini 又は e mano tini と表わされるとし、一方で、現代の数詞システムとしては、英語からの外来語 anere ‘100’、tausani ‘1,000’が用いられる、と述べている。

Carpentier and Beaumont (1995:14, 136)には、100 以上の数を表わす数詞として、ānere ‘100’、tauatini ‘1,000’、mirioni ‘1,000,000’といった外来語と思われるものが挙げられているほか、語彙集には mano ‘1,000’も含まれている。

クック諸島マオリ語にはいくつかの方言が存在する。Mangaian 方言については、Shibata (1999:96,121,245,321)に、rau ‘200’、mano ‘2,000’、kiu ‘20,000’、tini ‘200,000’の四つの形がある。一方で、Christian (1924:16,27)では mano は ‘4,000’となっており、tini は単に‘many’の意味となっている。

また、Penryhn 方言については、Shibata (2003:97,181,241)に rau ‘200’と mano ‘2,000’の二語があるほか、数詞によるカウントシステムの延長上にあると思われるものとして、tini

‘myriad’⁷⁾、mano tini ‘thousands of thousands’の二つの形がある。

	10 ²	10 ³	10 ⁴	10 ⁵	10 ⁶	∞
Large(ancient)	rau ‘200’	mano ‘2,000’				e tini / e mano tini
Large(modern)	anere	tausani				
Carpentier & Beaumont	ānere	tauatini				miriona
		mano				
Shibata(Mangaian)	rau ‘200’	mano ‘2,000’	kiu ‘20,000’	tini ‘200,000’		
Christian (Mangaian)		mano ‘4,000’				
Shibata(Penrhyn)	rau ‘200’	mano ‘2,000’				tini / mano tini

Table 26: Rarotongan numerals for 10² or higher

2.27. Maori (New Zealand) マオリ語 (東部ポリネシア諸語・タヒチ語群)

Best (1906)は三桁の数値を指す数詞として rau ‘100’と mano ‘1,000’を挙げた上で、マオリ語の数え方には一倍式と二倍式（ペア単位で一組、二組..と数えていく）の二つがあり、二倍式ではペアで数えるため実際には二倍の数値（‘1’を表わす数詞が二倍式では‘2’を意味する）となると指摘している。従って、rau ‘100’と mano ‘1,000’が二倍式の数え方で用いられる場合にはそれぞれ‘200’と ‘2,000’を指すことになる。また mano は「無数」‘numberless’の意味もあり、他に同じ意味で、mano tini、mano raua ko tini、mano tini whaioio、tini faaioio のような表現もあると述べている。

Malherbe (2007 :40)と Bauer(1993 :495)では rau ‘100’と mano ‘1,000’を挙げている。

Tregear (1968 :207,401,513)には rau ‘100’, mano ‘1,000’に加えて、「無数」‘myriad’ / multitude’を表わす tini がある。

また、Best (1906:180)は、昔は存在しなかったが、19世紀前半に導入されたシステムとして、rau ‘100’, mano ‘1,000’に加えて、tekau ‘10’や rau ‘100’を mano ‘1,000’と組み合わせた、tekau mano ‘10,000’, rau mano ‘100,000’のような形を挙げている。

現代マオリ語辞典である Ryan (1995:12)には rau ‘100’と mano ‘1,000’に加えて外来語の miriona ‘1,000,000’があるほか、mano tini 「数え切れない」‘countless’が含まれている。

	10 ²	10 ³	10 ⁴	10 ⁵	10 ⁶	∞
Best	rau ‘100/200’	mano				mano
		‘1,000/2,000’				mano tini
Malherbe/Bauer	rau	mano				

Tregear	rau	mano				tini
Best (19 th century~)	rau	mano	tekau mano (10x1,000)	rau mano (100x1,000)		
Ryan	rau	mano			miriona	mano tini

Table 27: Maori numerals for 10² or higher

2.28. Tahitian タヒチ語 (東部ポリネシア諸語・タヒチ語群)

19世紀に出された辞書である Davies (1851)には rau ‘100’、mano ‘1,000’の二つの形が含まれている。Académie tahitienne (1986:138)⁷⁾のタヒチ語文法は古代のシステムとして rau ‘100’、mano ‘1,000’、rehu ‘100,000’、‘iu ‘1,000,000’を挙げている。前節のマオリ語と同様にタヒチ語でも、「一組、二組..」とペアで数える数え方があり、その場合には rau が‘200’のように、それぞれ 2 倍の数を表わす。Peltzer (1996:37)は上記の四つの古代形に加えて、mano-tini ‘10,000’を含めている。

現代の数詞システムとしては、Académie tahitienne (1986:138)は hānere ‘100’、tauatini ‘1,000’、‘ahuru tauatini ‘10,000’、hānere tauatini ‘100,000’、mirioni ‘1,000,000’、miriā ‘1,000,000,000’を挙げている。Peltzer (1996:37)も miriā を除く五つの形を挙げている。⁹⁾

	10 ²	10 ³	10 ⁴	10 ⁵	10 ⁶	10 ⁹
Davies	rau ‘100/200’	mano ‘1,000/2,000’				
Académie 1986 (ancient)	rau ‘100/200’	mano ‘1,000/2,000’		rehu	‘iu	
Peltzer (ancient)	rau	mano	mano-tini	rehu	‘iu	
Académie 1986 (modern)	hānere	tauatini	‘ahuru tauatini (10x1,000)	hānere tauatini (100x1,000)	mirioni	miriā
Peltzer (modern)	hanere	tauatini	‘ahuru tauatini (10x1,000)	hanere tauatini (100x1,000)	mirioni	

Table 28: Tahitian numerals for 10² or higher

Henry (1928:324-5)では上記の ancient な数詞体系を obsolete と呼び、10⁶までは上記の Peltzer と同様であるが、それに続けて、tini iu ‘10,000,000’、rau iu ‘100,000,000’、mano iu ‘1,000,000,000’、更には‘10,000,000,000’を表す表現として a mano tini te ‘iu を挙げている、一方、現代の数え方としても、‘ahuru mirioni ‘10,000,000’、hanere mirioni ‘100,000,000’、pirioni ‘1,000,000,000’、‘ahuru pirioni ‘10,000,000,000’、tirioni ‘1,000,000,000,000’ という形を挙げている。

	10^7	10^8	10^9	10^{10}	10^{12}
ancient	tini 'iu	rau 'iu	mano 'iu	a mano tini te 'iu	
modern	'ahuru mirioni	hanere mirioni	pirioni	'ahuru pirioni	tirioni

Table 29: Tahitian numerals for 10^7 or higher (Henry 1928)

現代と古代の区別は明示していないが、最も大きな辞書である Académie tahitienne(1999) には rau '100 又は 200'、nāna'ihere '100 又は 200'、mano'1,000 又は 2,000'、mene'2,000'、mano tini '10,000'、'iu '1,000,000 又は 2,000,000'、それに加えて、「数えられない」'innombrable' を意味する tinitini の形があり、外来語としては、hānere '100'、tauatini '1,000'、mirioni '1,00,000' がある。

10^2	10^3	10^4	10^6	∞
rau '100/200'	mano '1,000/2,000'	mano tini	'iu '1,000,000 /2,000,000'	tinitini
nāna'ihere '100/200'	mene '2,000'			
hānere	tauatini		mirioni	

Table 30: Tahitian numerals for 10^2 or higher (Académie 1999)

2.29. Rurutu ルルツ語 (東部ポリネシア諸語・タヒチ語群)

Lemaître (1985:7)に rau '200' という形が挙げられている。

	10^2
Lemaître	rau '200'

Table 31: Rurutu numerals for 10^2 or higher

2.30. Rapa ラパ語 (東部ポリネシア諸語・タヒチ語群)

Stoke (1955: 332, 334)には、100 以上の数を表わす数詞として、kota'i rau '100'、kota'i mano '1,000'、erua rau '200'、erua mano '2,000'が挙げられている。ここから、rau '100'、mano '1,000' の二つの数詞が存在することがわかる。

	10^2	10^3
Stoke	rau	mano

Table 32: Rapa numerals for 10^2 or higher

2.31 Tuamotuan ツアモツ語 (東部ポリネシア諸語・タヒチ語群)

Tregear (1893-5)には具体的な数値を表わす数詞としては、100 以上を表わすものは挙げられていなかったが、数詞によるカウントの延長上にあると考えられるものとして「数えられ

ない」‘innumerable’を意味する manomano と tinitini、「限りなく大きな数」‘an indefinitely great number’を意味する kiukiu が含まれていた。

また、1964年出版辞書の復刻版である Stimson (2008)には、様々なツアモツ語の方言で見られたいろいろな形が含まれているが、三桁の数では rau ‘100’、kiu ‘200’、四桁の数では mano ‘1,000’、tini ‘1,000’、penu ‘2,000’、また古形として mano ‘2,000’、五桁の数では tini ‘20,000’、六桁の数では oneone ‘800,000’¹⁰⁾、七桁の数では one ‘1,600,000’¹⁰⁾、kiu ‘2,000,000’がある他、数詞によるカウントの延長上にあると考えられるものとして「数え切れない」‘innumerable’を意味する rau、manomano、「無数」‘myriad’⁷⁾を意味する mano、tini、titini、更に、「限りなく、言葉に表わせないくらい大きな数」‘an indefinitely or inexpressively great number’を表わす kiukiu がある。

	10 ²	10 ³	10 ⁴	10 ⁵	10 ⁶	∞
Tregear						manomano / tinitini kiukiu
Stimson	rau	mano				rau / manomano
		tini				mano / tini/ titini
	kiu 200	penu ‘2,000’			kiu ‘2,000,000’	kiukiu
		mano ‘2,000’	tini ‘20,000’		oneone ‘800,000’	one ‘1,600,000’

Table 33: Tuamotuan numerals for 10² or higher¹⁰⁾

3. 結び

3.1. どのくらい大きな数値を指す数詞が存在するのか

まず、外来語ではなく固有の単語で何桁までの数詞が存在するのかについて観る。Clark (1999:196-7)はポリネシア祖語の再建形として *rau ‘100’、*afe ‘1,000’、*mano ‘10,000’の三つの形を示し、それに加えて‘100,000’や‘1,000,000’のような更に大きな数値を指す*tini と*ki(l)uの二つの形がいくつかの言語で見られる、と述べている。実際、今回調べた言語の中でも、これらの五つの形から由来すると思われる数詞があらこちらで見られた。今回得られたデータをみると、最も多いのは‘100’と‘1,000’の二つの数詞を持つ言語であり、その中でも *rau と *afe に由来すると思われる形を持った言語が多かった。最高で何桁までの数詞が存在するのか調べてみると、今回得られたデータで、最高の数値を指す表現は、Bender and Beller (2006a:41, 2006b:396) の指摘の通り、‘10,000,000,000’という数値を指す表現を持つヌクオロ語の *sebagā* とタヒチ語の *a mano tini te ‘iu* であり、それに続くのが、‘2,000,000,000’という数値を指すマンガレヴァ語の *maeaea* である。尚、カピガマラギ語で Lieber & Dikepa (1974)が *duumaa di gelegele* ‘untold numbers, a trillion’ という形を挙げている。もし、trillion を文字通り

に取ると‘1,000,000,000,000’であるが、ここでは‘untold numbers’の言い替えて「無数」のような意味を表している可能性がある。

次に、外来語の数詞で何桁までの数詞が存在するのかについて見る。最も広く見られるのは英語の million ‘1,000,000’に由来する外来語である。一方、数は多くないが、million よりも大きな数値を表わす外来語数詞の例も見られる。その中でも最大の数値を指すのは trillion ‘1,000,000,000,000’由来の外来語であるハワイ語の kiliona とタヒチ語の tirioni である。

また、その言語で表わす最高の数値を指す表現について、数詞というよりも一つの文の形を成しているような表現の例がいくつか見られた。例えば、レンネル・ペロナ語 nimo te tau nga ‘10,000’、マエ語の ponotia e tasi ‘100’、タヒチ語 a mano tini te ‘iu ‘10,000,000,000’などである。

3.2. より大きな数値を表わすための数詞の組み合わせ

伝統的な数詞システムでは、大きな数値でも一つの語で表わす傾向があり、一方、現代的なシステムでは伝統的なシステムに比べて二つの数詞の組み合わせ形が使われる傾向がある。例えば、サモア語では、伝統的なシステムでは‘10,000’という数値は mano と一語で表わすのに対し、現代システムでは、二つの数詞 sefulu ‘10’と afe ‘1,000’を組み合わせせて sefulu afe ‘10,000’ (=10x1,000)という形を用いる。マオリ語の場合も Best (1906:180)が tekau ‘10’や rau ‘100’を mano ‘1,000’と組み合わせせた、tekau mano ‘10,000’, rau mano ‘100,000’のような組み合わせ形は現代になって 19 世紀前半に導入されたシステムであると明示している。タヒチ語の場合にも、伝統的なシステムでは‘100,000’を rehu と一語で表わすのに対して、現代システムでは hānere tauatini ‘100,000 (=100x1,000)’のように二つの数詞の組み合わせ形が用いられている。しかしながら、タヒチ語については、表 29 に示したように、Henry(1928:324-5)が古代形として、例えば rau ‘iu ‘100,000,000’=(100x1,000,000)のような組み合わせ形の例を挙げている。これらについては、Bender & Beller (2006b:383) は、表 29 で示した古代形の事例は本当にタヒチ語固有の表現なのか明確ではないと指摘している。

言うまでもないが、英語由来の外来語数詞を使うシステムの場合には ‘1,000’の次は ‘1,000,000’のように間が開いてしまうので、組み合わせ形を使う以外にはない。例えば、タヒチ語の現代システムでも ‘ahuru tauatini ‘10,000’ (=10x1,000)、hānere tauatini ‘100,000 (=100x1,000)’のような組み合わせ形を用いている。

3.3. 無数・無限を表わす表現

「無限・無数」、「とても大きな数」のように数詞によるカウントの継続を断念した時に用いる表現についてもいくつかのパターンが見られた。

最も頻繁に見られたのは、その言語における最も高い数値もしくはそれに準ずる数値を指す数詞がそのままの形で、或いは反復形で「無限・無数」、「とても大きな数」の意味を表わす場合である。例えば、マオリ語で‘1,000’を表わす数詞 mano は「無数」という意味でも使われる。また、マルケサス語では最も高い数値‘10,000’を表わす tini を三回、ないし四回くりかえして tini, tini, tini, tini で「数えられない数」を表わす。サモア語でも同じように最も高い数値‘10,000’を表わす mano の反復形 manomānō が「数え切れない」・「とても大きな数」の意味を表わす。

もう一つのパターンは、「忘れる、失われる」のような意味を持つ単語で「無数・無限」を表わす場合である。レンネル・ベロナ語で「ありえない大きな数」を表す *nimo* には「忘れる、消える」の意味がある。メレ・フィラ語で「とても大きな数」を表わす *mantaṣaroṣaaro* も「何かを忘れる」という意味がある。ハワイ語で Pukui & Elbert (1986)などが「無限」の意味を表わすと指摘する *nalowale* にも「消える、忘れられる」の意味がある。

興味深い例として、カピガマラギ語の「計り知れない数」を表わす *duumaa di gelegele* がある。*gelegele* には「砂」という意味がある。ちなみに、「無数・無限」という意味ではないが、ツアモツ語の Reao 方言に *oneone* ‘800,000’、*one* ‘1,600,000’ という形がある。この *one* にも「砂」という意味がある。無数にある細かい砂の粒子を「無数・無限」或いはかなり大きな数値になぞらえたということはあるだろう。

3.4. 数詞とその指す数値が一对一で対応しない場合

同じ言語についての異なる記述データ間で、同じ数詞が指す数値がずれている事例がいくつも見られた。例えば、ヌクオロ語について、Carroll & Soulik(1973:257,286,324-326)では *mano* は‘1,000’であるが、Christian(1898:228)では‘100’である。また、同じ数値を指す数詞が二つ示されている事例もある。例えば、ツヴァル語の Nanumea 方言では‘1,000’を指す数詞として *afe* と *mano* の二つの形がある。更に、ティコピア語については、Firth(1985:xxxvii)が *afe* ‘1000’、*mano* ‘10,000’ という二つの形の数値が話者によっては逆転することがあると述べている。

このような揺れの原因としてはいくつかのことが考えられる。一つは、普段あまり使わない大きな数詞なので、話者の知識が不均等であることが考えられる。Firth(1985:xxxvii)はティコピア語について、1,000 以上の数詞を認識できる人は少なくなっていると言及しているし、レンネル・ベロナ語については、Elbert (1988:188-9)が、大きな数を指す数詞の相対的な順序に自信がない人も存在し、また、若者は 1,000 以上の数詞は使わないとも述べている。

もう一つは、数える対象による数詞システムの違いである。1.1 節で述べたように、ポリネシア諸語には特定のもの（タロ芋、魚など）を数えるときにそれぞれ独自の数詞システムを用いる場合があり、その場合に、同じ数詞であっても数える対象によりその指す数値が異なる場合がある。同じ数詞が違う数値を表わしたり、同じ数値を異なる二つの数詞が表したりするような原因としては、このような数える対象による異なる数詞システムの存在も考えられる。

謝辞

* 本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究C一般「ポリネシア諸語の数詞体系と数詞間の文法的特性の推移についての対照研究」課題番号：22520417 研究代表者：塩谷亨）による研究の初年度分の成果の一部によるものである。ハワイで行った文献資料収集に際して、ハワイ大学 Jack Ward 先生、Roiti Sylva 先生から貴重なアドバイスを頂いたことに感謝の意を表したい。

注

¹⁾ ヌクオロ語、カピガマラギ語はミクロネシアで話されている言語、ヌクリア語、ヌクマヌ語、ルアギウア語、シカイアナ語、レンネル・ペロナ語はメラネシアのソロモン諸島で話されている言語、ピレニ語、テニコピア語、マエ語、メレ・フィラ語、西ウヴェア語、西フツナ語はメラネシアのサンタ・クルス諸島、ニューヘブリディーズ諸島で話されている言語である。尚、ルルツ語という言語名は亀井他(1992)には載っていない。ツプアイ語の中にその方言として含まれていると思われる。

²⁾ Besnier (2000)では kiu は単に「多い」を意味する語である。Randy(1980)では afe と mano という二つの形が同じ数を表わすことになるが、これは、数えられるものの種類による使い分けの可能性がある。

³⁾ Elbert (1988:188-9)によれば、nimo の用法には個人差が見られる場合があり、nonoa/ ninimo で置き換える人もいるとのことである。また、ninimo という形が nimo より大きいと考える人もいて、その場合には、結果として nimo が‘1,000,000’、それより大きい ninimo が ‘10,000,000’を表わすことになるかと述べている。

⁴⁾ tasi は数詞の‘1’であるが、ponotia については Capell (1962: 38)は、おそらく‘against’の意味だろうと分析している。

⁵⁾ Clark(1998:37)によれば、mijikao はポリネシア祖語の lima te kau 「20 が 5 つ」‘five score’に由来するものであり、mantaġaroġaaro は man-ġaroġaaro 「何かを忘れる」‘forget about something’と関連する語である。

⁶⁾ 「無数」を表わす puni の意味については詳しく述べられていない。辞書部分には「年」année というエントリーがある。

⁷⁾ myriad には古用法或いは詩的・修辭的用法の意味として‘10,000’という意味がある。その文字通りの数値を表わしているとすれば、数詞システムの表中に含めることもできる。

⁸⁾ Académie tahitienne による文献を二種類引用するので、区別するため、下表中では、発行年を付して Académie tahitienne (1986)を Académie1986 と表記し、後で引用する Académie tahitienne (1999)は Académie 1999 と表記する。

⁹⁾ Tryon (1970)と Lemaître (1995)も hānere ‘100’、tauatini ‘1,000’の形を、Lazard & Peltzer (2000:210)も hānere ‘100’、tauatini ‘1,000’、hānere tauatini ‘100,000’の形を挙げている。

¹⁰⁾ Stimson (2008)によれば one という単語は「砂」という名詞の意味を持つ。

¹¹⁾ Stimson (2008)によると、‘200’を表わす kiu は Napuka と Fagatau 方言で、penu は Takume、Anaa 方言（方言欄には FAK という略語があったが、これは略号表にはないため、どの方言を指すか不明）で、‘1,000’を指す tini は Fagatau 方言で、‘2,000’を指す mano は Fagatau と Anaa 方言（古形）で、‘20,000’を指す tini は Anaa 方言で、one 及び oneone は Reao 方言で、‘2,000,000’を指す kiu は Fakahina 方言で、それぞれ、見られた形である。

参考文献

- Académie tahitienne. (1986). *Grammaire de la langue tahitienne*. Papeete : Fare Vāna‘a.
 Académie tahitienne. (1999). *Dictionnaire tahitien-français*. Papeete : Fare Vāna‘a.
 Allardice, R. W. (1985). *A Simplified dictionary of modern Samoan*. Auckland: Polynesian Press.
 Andrews, Lorrin. (2003). *A dictionary of the Hawaiian Language*. Honolulu: Island Heritage.
 Bauer, Winifred. (1993). *Maori*. London & New York: Routledge.

- Beaglehole, Ernest and Pearl. (1938). *Ethnology of Pukapuka* Bernice P. Bishop Museum Bulletin 150. Honolulu: Bishop Museum Press. Reprinted by Kraus Reprint in 1971.
- Beckwith, Martha W. (2007). *Kepelino's tradition of Hawaii*. Honolulu: Bishop Museum Press.
- Bender, Andrea and Sieghard Beller. (2006a). "Fanciful" or genuine? bases and high numerals in Polynesian number systems. *Journal of the Polynesian Society*, 115.7-46.
- Bender, Andrea and Sieghard Beller. (2006b). Numeral classifiers and counting systems in Polynesian and Micronesian languages: common roots and cultural adaptations. *Oceanic Linguistics*, 45.2:380-403.
- Besnier, Niko. (2000). *Tuvaluan*. London: Routledge.
- Best, Elsdon. (1906). Maori numeration: some account of the single, binary, and semi-vigesimal systems of numeration formerly employed by the Maori. *Transactions and proceedings of the Royal Society of New Zealand*, 39: 150-180.
- Best, Elsdon. (1907). Maori numeration: the vigesimal system. *Journal of the Polynesian Society*, 16: 94-98.
- Burrows, Edwin G. (1936). *Ethnology of Futuna*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 138. Honolulu: Bishop Museum Press. Reprinted by Kraus Reprint in 1971.
- Carroll, Vern and Tobias Soulik. *Nukuoro lexicon*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Capell, A. (1935-7). The Sikayana language: a preliminary grammar and vocabulary. *Journal of the Polynesian Society*, 44: 163-172; 45: 9-16, 67-73, 142-153; 46: 24-31.
- Capell, A. (1962). *The Polynesian language of Mae (Emwae), New Hebrides*. Auckland: Linguistic Society of New Zealand.
- Capell, A. (1984). *Futuna-Aniwa dictionary, with grammatical introduction*. Canberra: The Australian National University
- Carpentier, Tai T. T. and Clive Beaumont. (1995). *Kai korero*. Auckland: Pasifika Press.
- Christian, F. W. (1898). Nukuoro vocabulary. *Journal of the Polynesian Society*, 7: 224-232.
- Christian, F. W. (1924). *Vocabulary of the Mangaian language* (Bernice P. Bishop Museum Bulletin 11). Honolulu: Bishop Museum Press. Reprinted by Kraus Reprint in 1971.
- Chruchward, C. M. (1953). *Tongan grammar*. London: Oxford University Press.
- Churchward, Spencer. (1951). *A Samoan grammar*. 2nd edition. Melbourne: Spectator Publishing.
- Clark, Ross. (1998). *A dictionary of the Mele language*. Pacific Linguistics, Series C: No.149. Canberra: Australian National University.
- Clark, Ross. (1999). Proro-Polynesian numerals. In Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li (eds), *Selected papers from the eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, Taipei: Institute of Linguistics, 195-204.
- Cléac'h, Hervé Le. (1997). *Pono Tekao Tapapa 'ia*. Papeete: 'Eo Enata.
- Davies, John. (1951). *A Tahitian English dictionary with introductory remarks on the Polynesian language and a short grammar of the Tahitian dialect*. Tahiti: London Missionary Society.
- Du Feu, Veronica. (1996). *Rapanui*. London, New York : Routledge.
- Dordillion, I. R. (1904). *Grammaire et dictionnaire de la langue des Iles Marquises*. Paris : Imprimerie Belin Frères. Reprinted by Societe Etudes Oceaniennes in 2007.

- Dougherty, Janet W. D. (1983). *West Futuna-Aniwa*. Berkeley: University of California Press.
- Early, Robert. (2002). Niuafu'ou. In John Lynch et al. (eds), *The Oceanic languages*. Richmond: Curzon, 848-864.
- Elbert, Samuel H. (1988). *Echo of a culture*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Firth, Raymond. (1985). *Tikopia-English dictionary*. Auckland: Oxford.
- Fuentes, Jordi. (1960). *Diccionario y gramática de la lengua de la Isla de Pascua*. Santiago: Editorial Andres Bello.
- Henry, Teuira. (1928). *Ancient Tahiti*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 48. Honolulu: Bishop Museum Press. Reprinted by Kraus Reprint in 1985.
- Hunkin, Galumalemana A. L. (1988). *Gagana Samoa*. Auckland: Polynesian Press.
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編. (1992). *言語学大事典*、第3巻. 東京: 三省堂.
- Large, J. J. (1902). The vigesimal system of enumeration. *Journal of the Polynesian Society*, 11: 260-261.
- Lazard, Gilbert and Louise Peltzer. (2000). *Structure de la langue tahitienne*. Paris : Editions Peeters.
- Lemaître, Yves. (1985). Les systèmes de numération en Polynésie orientale. *Journal de la Société des océanistes*. 41: 3-13.
- Lemaître, Yves. (1995). *Lexique du tahitien contemporain*. Paris : IRD Édition.
- Leverd, A. (1922). Polynesian linguistics: I.—Polynesian language of Uvea, Loyalty Islands. *Journal of the Polynesian Society*, 31: 95-103.
- Lieber, Michael D. and Kalio H. Dikepa. (1974). *Kapingamarangi lexicon*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lynch, John, Malcom Ross and Terry Crowley. (2002). *The Oceanic languages*. Richmond: Curzon.
- Malherbe, Michel. (2007). *Parlons Maori*. Paris: L'Harmattan.
- Milner, George. B. (1966). *Samoan dictionary*. London: Oxford University Press.
- Moorfield, John C. (2001). *Te whanake I, te kākano*. Auckland: Longman.
- Mosel, Ulrike and Ainclie So'o. (1997). *Say it in Samoan*. Canberra : Pacific Linguistics.
- Moyse-Faurie, Claire. (1993). *Dictionnaire futunien-français*. Paris: Peeters.
- Neffgen, H. (1918). *Grammar and the vocabulary of the Samoan language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Reprinted by AMS in 1978.
- Peltzer, Louise. (1996). *Grammaire descriptive du tahitien*. Papeete: Éditions Polycop.
- Pratt, George. (1911). *Pratt's grammar and dictionary of the Samoan language*. 4th edition. Reprinted by Malua Printing Press in 1977.
- Pukui, Mary K. and Samuel H. Elbert. (1986). *Hawaiian Dictionary*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ranby, Peter. (1980). *A Nanumea lexicon*. Pacific Linguistics, Series C: No.65. Canberra: Australian National University.
- Ray, Sidney H. 1912. Polynesian linguistics: II.—Polynesian languages of the Micronesian border. *Journal of the Polynesian Society*, 21: 164-172.
- Ray, Sidney H. 1915. Polynesian linguistics: II.—Polynesian languages of the Micronesian border. *Journal of the Polynesian Society*, 24: 62-64, 92-97.
- Ray, Sidney H. 1916. Polynesian linguistics: III.—Polynesian languages of the Solomon Islands. *Journal of the*

Polynesian Society, 25: 18-23, 99-103.

Ray, Sidney H. 1917. Polynesian linguistics: III.—Polynesian languages of the Solomon Islands. *Journal of the Polynesian Society*, 26: 34-44, 99-105, 170-179.

Ray, Sidney H. 1920. Polynesian linguistics: IV.—Polynesian languages of the Santa Cruz Archipelago. *Journal of the Polynesian Society*, 29: 77-86, 207-214.

Ray, Sidney H. 1942. Notes on the Fila language, New Hebrides. *Journal of the Polynesian Society*, 51: 153-80.

Rensch, Karl H. (1984). *Tikisionalio fakauvea-fakafalani*. Pacific Linguistics, Series C: No.86. Canberra: Australian National University.

Rensch, Karl H. (1986). *Tikisionalio fakafutuna-fakafalani*. Pacific Linguistics, Series C: No.90. Canberra: Australian National University.

Ryan, P. N. (1995). *The Reed dictionary of modern Māori*. Auckland: Reed.

Salmond, Anne. (1972). *A Generative syntax of Luangiua*. The Hague: Mouton.

Shumway, Eric B. (1988). *Intensive course in Tongan*. Revised edition. Laie: The Institute for Polynesian Studies, Brigham Young University-Hawaii.

Shibata, Norio. (1999). *Mangaian-English dictionary*. Rarotonga: The Cook Islands Library and Museum Society.

Shibata, Norio. (2003). *Penrhyn-English dictionary*. Endangered Languages of the Pacific Rim A1-005.

Sperlich, Wolfgang B. (1997) *Niue language dictionary*. Government of Niue.

Stimson, J. F. (2008). *A dictionary of some Tuamotuan dialects of the Polynesian language*. The Hague: Martinus Nijhoff. Reprinted by Societe de Etudes Oceaniennes in 2008.

Stokes, John F. G. (1955). Language in Rapa. *Journal of the Polynesian Society*, 64:315-340.

Te Rangi Hiroa. (1938). *Ethnology of Mangareva* Bernice P. Bishop Museum Bulletin 150. Honolulu: Bishop Museum Press. (Reprinted by Kraus Reprint in 1971.)

Tetahiotupa, Edgar. (2009). *Parlons Marquisien*. Paris: L'Harmattan.

Thompson, Richard and 'Ofa. (2000). *The student's English-Tongan and Tongan-English dictionary*. American edition. Palo Alto: Friendly Isles Press.

Tregear, Edward. (1893-1895). A Paumotuan dictionary I. *Journal of the Polynesian Society*, 2:195-202, 3:1-8, 51-58, 113-120, 179-186, 4:1-16, 73-88, 157-160.

Tregear, Edward. (1968). *Maori-Polynesian comparative dictionary*. Oosterhout: Anthropological Publications.

Tregear, Edward. (2009). *Mangareva dictionary, Gambier Islands*, 2eme edition. Papeete: Societe des Etudes Oceaniennes.

Tregear, Edward and Stephenson P. Smith. (1907). *Vocabulary and grammar of the Niue dialect of the Polynesian languages*. Wellington: Government Printer. Nabu Public Domain Reprints.

Tuinukuafe, Edgar. (1992). *A Simplified dictionary of modern Tongan*. Auckland: Pasifik Press.

Tryon, Darrel T. (1970). *Conversational Tahitian*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.

Tryon, Darrell T. et al. (eds). (1995). *Comparative Austroonesian dictionary*. 4 volumes. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Williams, Harold. (1893). Vocabulary of the language of Niue (Savage Island). *Journal of the Polynesian Society*,

2:17-24, 65-70.

執筆者紹介

氏名：塩谷 亨

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp